九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Involuntary movements and coma as the prognostic marker for acute encephalopathy with biphasic seizures and late reduced diffusion

李, 守永

https://hdl.handle.net/2324/1831410

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏　　名：　李（リ）　守永（スヨン）
Lee Sooyoung

論 文 名：Involuntary movements and coma as the prognostic marker for acute encephalopathy with biphasic seizures and late reduced diffusion
（二相性けいれんと遅発性拡散能低下を呈する急性脳症において不随意運動と昏睡は予後予測マーカーとなる）

区　　分：乙

論　文　内　容　の　要　旨

二相性けいれんと遅発性拡散能低下を呈する急性脳症（acute encephalopathy with biphasic seizures and late reduced diffusion: AESD）は、感染に伴って小児期に発症する。1 相目に有熱性けいれん重積があり、2 相目にけいれん群発、意識レベルの増悪、拡散能低下を伴う白質病変が出現するのが特徴である。患者はしばしば重篤な神経学的後遺症を持つが、その予後因子は知られていない。本研究の目的は、重篤な神経学的後遺症を残す AESD の特徴を明らかにすることである。我々は、AESD 患者で後に重度の神経発達障害を呈した重症群（8 名）とそうでない非重症群（12 名）で、臨床所見、血液検査所見、および脳画像を後方視的に検討した。重症群では、非重症群と比べ、2 相目の前に、昏睡（$p = 0.014$）またはジストニア・口部ジスキネジアを含む不随意運動（$p = 0.018$）を多く認め、血清アラニンアミノトランスフェラーゼはより高値（$p = 0.001$）であった。また、2 相目に定量的に評価した MRI で、非重症群と比べて重症群では大脳の前方部（$p = 0.015$）および後方部（$p = 0.001$）、基底核（$p = 0.020$）で、より大きな病変を認めていた。早期に出現する不随意運動や昏睡は、AESD 患者において急性期の脳病変および神経学的予後不良を反映しているのかもしれない。